別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　　永井　邦芳

論　文　題　目

地域生活への移行を目指す精神障害者のカミングアウト意思とセルフスティグマ、自己概念の関連について

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学教授　　玉腰　浩司

名古屋大学教授　　池松　裕子

名古屋大学教授　　梶田　悦子

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

我が国の精神障害者の精神保健医療福祉における長年の課題は、入院治療中心からの脱却であり、約７万人の社会的入院者の解消を目標に様々な取り組みがなされている。精神障害者に対する地域社会の受け入れを阻害する要因としては、社会が抱いている精神障害者に対するネガティブなイメージや感情がある。これらは“スティグマ”として偏見や差別を生み出し、当事者のアイデンティティを損なうことになるため、精神障害者であることを人に知られたくないと考えている当事者は少なくない。
しかし、統合失調症を始めとした精神疾患の多くは慢性的な経過をたどるため、必要なサポートを受けることは安定した地域生活を送る上で重要であり、地域社会での対人交流を避けて通ることはできないことから当事者自らが、精神障害者であるという事実を開示（以下カミングアウト）するか否かについて意思決定することを迫られることになる。本研究は、精神障害者がカミングアウトに対する意思をどのように確立していくのかを地域生活支援施設に通所する精神障害者に対し、半構造化面接により探索し（研究 1）、その結果を基にカミングアウト意思に影響を与える要因とカミングアウト意思そのものが自己概念に与える影響について構造方程式モデルによる検証を行った（研究 2）。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 地域精神障害者支援施設に通所する精神障害者のカミングアウト意思確立のプロセスは、【自己への問い直し】、【自己の主体性の獲得】、【背中を押す力】の３つのカテゴリーで構成されていた。カミングアウトの意思確立のプロセスは、【自己への問い直し】という心的作業を通して自己存在と向き合い、社会との向き合うスタンスを変化させていく【自己の主体性の獲得】のプロセスであった。またそのプロセスにおいて、周囲のサポートを実感することが【背中を押す力】となっていた。カミングアウト意思の確立のプロセスは、自分の人生を前向きに捉えなおし、主体的に生きていこうとする意思の表れであった。これはリカバリーの概念に共通し、自分自身をエンパワーしていくプロセスである。（研究 1）
2. 構造方程式モデルによる仮説検証により、ソーシャルサポートに対する満足感に支えられたカミングアウトに対する肯定意識は、地域生活への自立意識を高め、失敗を恐れない意思を持つことにより自己効力感を高め、ひいてはセルフスティグマを低減させることが示された。（研究 2）
3. 地域生活を送る精神障害者がカミングアウト意思を確立していくプロセスを明らかにするとともに、　カミングアウト意思が自己効力感を高めセルフスティグマを低減するパターンを証明したことは、精神障害者の地域生活移行支援において障害開示支援の重要性を裏付けるものと考える。

以上の理由により、本研究は博士（看護学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

38 字×35 行

別紙２

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※第　　号	氏　名	永井　邦芳
試験担当者	主査　名古屋大学教授　玉腰浩司 印 名古屋大学教授　池松裕子 池松 名古屋大学教授　梶田悦子 印		

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

１．開発したスティグマ尺度の応用について
２．カミングアウト意思の経験による影響について
３．カミングアウトの定義について
４．エンパワメント尺度の妥当性について
５．パス解析の前提条件と使用上の留意事項について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、看護学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。